

ペピータくらぶ×成蹊大学
ダンス・パフォーマンスプロジェクト「マノ・マノ・ムーチョ！」からのお便り

マノマノ通信



2022年7月発行

ペピータくらぶ ご家族のみなさま

こんにちは、講師の大西です。

先日、このプロジェクトの成果発表として「お披露目会」を開きました。ペピータくらぶのご家族、会員の皆さま、そして地域で応援して下さる多くの皆さまに見守られ、会はとても充実した場となりました！ありがとうございました。

実を言えば、お披露目会の日、ペピータくらぶのメンバー全員が初めて同じ時間に揃うことができた日でした。それまで彼らは、いつもお仕事の後に駆けつけてくれていたからです。成蹊大のメンバーを含め、‘パフォーマー’全員がまるまる1時間の演目を共にすることが初めてだったのです。それにもかかわらず、彼らはこれまでの過程で経験し、それぞれの身体に育んだ力を最大に発揮してくれました。お客さんとの間には、たくさんの笑いが生まれ、スタジオは拍手と驚きの喚声で溢れていました。

今思うに、これまでのワークショップのある側面が私も含めたパフォーマーたちにとって「毎回ちょっとずつ違うこと」の中に身をおく練習となっていたのかもしれませんが、もちろん、普段のペピータくらぶという安心が土台にあってこそ意識できること。それに、毎回一筋縄ではいかないことだらけ（笑）でした。それでも、一人ひとりが毎回何か「ちがう」「違和感がある」「異なる」ことに向き合い続けることが、お互いにとっての‘稽古’の場となっていたのかもしれません。

この稽古は、誰一人として、自分一人ではできないことだったと気づきました。「他者」の存在がなければ生まれえない、かけがえのない場だったと思います。

それでは、本号をもって「最終号」です。お披露目会の様子をお届けします！

胸いっぱい感謝を込めて。

2022年7月 大西 健太郎

6/19 お披露目会

場全体がパフォーマンスに

自分が外にいることがお客様の没入感のきっかけになれたのではないかなと思います。みんなが私に手の挨拶をしてくれたことで、これが一つの作品なのだという認識を与えられたと感じます。実際には困惑していたかもしれませんが、手の挨拶に応じてくださる方もいて、自分達が目標としていた追体験を行なってもらうことや、会場を巻き込むということが達成できました。

お客様として来てくださった方が飛び入り参加してくださったのも、その場全体が作品になりうるんだとみんなを感じるきっかけになったと思います。お披露目会当日は、いつもとは違った雰囲気ではありましたが、その雰囲気がマイナスマなものではなく、皆様にやってきたことをお見せするというプラスな方向に働いていたと感じます。他のパフォーマーとのセッションは、手の会話一回でしたが、お客様の反応をスタジオの中につなぐ役として振る舞うことで、この場全体に働きかけるパフォーマーとしてずっとそこにいたのかなと思います。

とても楽しかったです。正直、プロジェクト班になったときは不安もありましたが、お披露目会だけでなく、全ての場面で班のみんなや大西さん、榎原先生、酒井さんに助けられながら、ペピータくらぶの皆さんと活動できてとても貴重な体験ができ、視野の広がりを感じました。参加できてよかったです。（朝倉）

写真撮影： 矢田 正成

成蹊大学「マノ・マノ・ムーチョ！」撮影班
(表面、裏面ともに)



▲ スタジオの外（廊下）からお客さんによって寄せられた「お花紙」を運ぶガイド役のパフォーマー。



▲ お客さんの手には、パフォーマンスに対して合いの手を入れるアイテム＝「お花紙」が握られている。



▲ スタジオの内と外から投げかけられるリアクションを受け、即興的なパフォーマンスが生まれる。



自分の感覚に正直にいられる場がある

一言で言うと、とにかく楽しく、そして自分たちがこれまで作り上げてきた関係や空気、プロジェクトの内容すべてに自信を持てる時間でした。お披露目会ということでいつもより緊張し、少しいつもと違う雰囲気は漂っていましたが、それが良い刺激になりました。

また、途中でお花紙の表現が広がっていった場面で、メンバー同士が接触したときに「ごめん!」「いいよ」と自然な掛け合いができていたことに感動しました。私たちが全6回で一緒に活動をし、築いてきた関係というのがあの瞬間に詰まっているような気がしました。こうしたふとした「実り」の瞬間に気づくことができたのも、パフォーマンスの途中で休むという選択肢があったからこそだと思います。みんなが盛り上がる中、じゃあ休んでみようと思う自分の感覚に正直にいられる場があることが、マノマノの一つの価値ではないかと感じます。

初めはどのようなプロジェクトになるか全く見えず不安な部分困った部分がとても多かったのですが、最終的には非常に濃いプロジェクトになったのではないかと思います。毎回前後で振り返り、そして次回はこうしてみようという試行錯誤に時間をかけていたことで体感的にもすごく充実した時間になりました。

(角屋敷)



表現の「輪」が広がる瞬間

本番が無事に終了致しました。本番はとにかく「楽しかった」という一言に尽きる内容でした。これまでの6回で築いてきたペピータの方々との関係性が見えた回になったと感じました。これまでの回はスタジオ内の中心付近で表現が完結していたため、表現の輪というものがなんとなくできてしまっていたのですが、今回はスタジオ内すべてが表現の場になっていました。外にお客さんがいたことで「輪」というものが意識されなくなったのかもしれないと感じました。

これまでの回で少しずつ積み重ねてきたことが実りとして実感できる回で、最終回にふさわしい1時間だったと感じています。

このプロジェクトが始まった当時、私は自分が今まで接したことがない方々との交流と身体表現という未知のものに対して、不安が大きかったです。しかし、回を重ねるうちに「今回はうまくできなかったから、次回は工夫してみよう」「今日は全員笑顔が見られたな」と自分自身がこのプロジェクトへ前向きに向き合えるようになっていました。このようにこのプロジェクトを通して、私自身が大きく成長させていただけました。

三ヶ月間、皆さまあたたかく見守ってください、ありがとうございました!

(落合)

